



言語の冠詞の発達・未発達の原理

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 函館英語英文学会 公開日: 2025-05-07 キーワード: 作成者: 濱田, 英人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000594

言語の冠詞の発達・未発達の原理*

濱 田 英 人
(札幌大学名誉教授)

1. はじめに

英語に冠詞 (a/the) の体系が発達していることは周知のことであり、不定冠詞 (a) は指示対象が「可算名詞」であり、発話状況の中で任意の実体であることを表し、それに対して定冠詞 (the) は指示対象が発話状況の中で唯一的に同定可能 (uniquely identifiable) な実体であることを表す。そのため、(1) では、聞き手は a dog を新情報で任意の実体として理解するのであり、(2) では、聞き手は the dog を旧情報で唯一的に同定可能な実体として理解するわけである。

(1) I saw a dog in front of your house.

(2) The book you sent me was interesting.

それに対して日本語では冠詞の体系は未発達であり、(3)、(4) のように、「犬」や「本」には冠詞に相当するものが付加されていない。

(3) あなたの家の前で犬を見た。

(4) あなたが送ってくれた本は面白かった。

小稿では、言語の文法装置は言語話者のコミュニケーション上必要であるものは発達し、特に必要でない場合には未発達であるという視点から、日英語の冠詞体系の有無について考察する。そしてこのことが日本語と英語に特有なのではなく、むしろ SOV 言語と SVO 言語の特徴であることを述べる。第2節では、冠詞の必要性について認知文法の考え方を概観する。第3節では、ヒトの本来的なモノの認識の在り様について認知科学の知見を概観し、この認識では冠詞は不必要であることを述べる。続く第4節では、冠詞体系が発達している英語話者の事態認識について述べる。第5節では、第4節での議論を踏まえ、そもそもなぜ英語の定冠詞は the であるのかについて考察する。第6節では、定冠詞の発達・未発達は英語と日本語の問題ではなく、むしろ SVO 言語と SOV 言語の問題であることを指摘する。第7節はまとめである。

* 匿名の査読者の方には、本稿を入念にお読み頂き非常に建設的なご意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

2. 冠詞 (a/the) の必要性についての認知文法の考え方

認知文法では、(5)に述べられているように、語や文はグラウンド（話し手、聞き手、発話の場面から構成される場）と結びつくことで意味をなすと考える。この認知操作をグラウンディングと言う。英語のように冠詞体系が発達している言語では、語の指示物は、概念化者の発話場面での定・不定を特定するグラウンディングという認知操作を経て、グラウンディング要素である冠詞 (a/the) や指示詞が付加されるわけである。

(5) Through nominal grounding [...], the speaker directs the hearer's attention to the intended discourse referent, which may or may not correspond to an actual individual. Clausal grounding [...] situates the profiled relationship with respect to the speaker's current conception of reality. In this way grounding establishes a basic connection between the interlocutors and the content evoked by a nominal or a finite clause.

(Langacker (2008: 259))

具体的に言えば、図1は Type plane 上のタイプ (type) としての cat (C) の Instance plane 上の具現形 (instance) の1つ (c_i) がグラウンディング要素である this によってグラウンド (G) と結びつけられることで、その具現形の認識が確立することを図示したものである。このように、指示詞 (this/that) や冠詞 (a/the) というグラウンディング要素は、実体 (entity) がグラウンドと結びつけられて認知処理されたことを標示するマーカーであるということである。

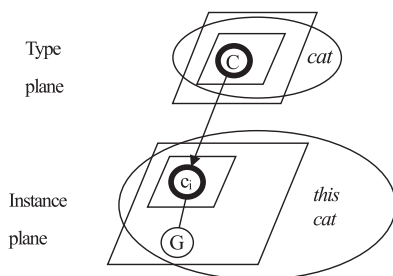


図1

(Langacker (1999: 271))

このグラウンディングという認知操作は、認知科学でも同様に議論されており、Pecher and Zwaan (2005) は、以下のように、どのように（言語）記号が現実世界（発話状況）に写像されるかという問題であり、外界世界と関係付けられなければ、（言語）記号は本質的に意味をなさない¹と述べている。

¹ このことに関して、Glenberg et al. (2005) は、言語記号は行為や知覚のような非言語的な経験に

(6) The grounding problem is the problem of how the symbols are mapped back onto the real world. [...] However, without any reference to the outside world such symbols are essentially meaningless. Therefore, it seems more fruitful to consider cognition to be grounded in the human body and its interaction with the environment, and thus in perception and action. (Pecher and Zwaan (2005: 2))

このように、語や文はグラウンドと結びつくことで意味をなすとすると、すべての言語にグラウンディングという認知操作が必要だということになる。しかし、英語には語が「定・不定」であることを表すグラウンディング要素である冠詞 (a/the) があるが、日本語にはない。では、なぜ日本語には冠詞がないのかということになるが、このことに関して Langacker (2008) は、次のように、多くの言語では英語の定冠詞に対応するものがないが、そうした言語では、指示詞を広範囲に使用することでこの領域を部分的にカバーしていたり、あるいは、定的な指示を達成する手段として、名詞が顕在的なグラウンディング要素がなく現れる言語もあると述べている。²

(7) Many languages lack anything comparable to the English definite article but seem not to suffer from its absence. They partially cover its territory through a wider use of demonstratives. As another means of achieving definite reference, a noun can occur without any overt grounding element. (Langacker (2008: 286))

そこで改めて、英語のグラウンディング要素である冠詞 (a/the) の役割について考えてみると、定冠詞 (the) が発話状況から唯一的に同定可能な実体 (モノ) を表すのであれば、the がないということは、必然的にその実体が任意の実体であることになる。そうすると、任意の実体を表すためにあえて不定冠詞 (a) を使う必要はないわけである。では不定冠詞は何のためにあるのか。結論的には、不定冠詞は名詞の指示物が一定の形あるいは境界 (boundary) を認識できる (つまり可算として認識できる) 具体的なモノ (instance) であることを表示する文法装置であり、このように不定冠詞が可算名詞を表示する文法装置であるということは、以下のように、不定冠詞が数詞から発達したことからもうかがえる。

写像されることで意味のあるものになるとして、以下のように述べている。

(i)[...] the symbols used by language become meaningful through grounding. [...] One hypothesis is that linguistic symbols (e.g., words and syntactic constructions) become meaningful only when they are mapped to nonlinguistic experience such as actions and perceptions. (Glenberg et al. (2005: 115))

² このことは、英語のように語彙的な名詞 (noun) がグラウンディング要素である冠詞を伴うことで名詞句 (nominal) となりインスタンスであることが表示される言語がある一方で、日本語のように明示的なグラウンディング要素を伴うことなく名詞がそのまま名詞句となりインスタンスであることを表すことができる言語もあることを示唆している。

更にヒトの認識と言語の関係について、Zwaan and Madden (2005) は、(9) のように、外界世界とのインタラクションは脳内に知覚体験の痕跡を残し、この痕跡が活性化してメンタルシミュレーションすることで認知が形成されるのであり、言語化された語や文法は、脳内で事態をメンタルシミュレーションするために、知覚体験の痕跡を再活性化したり結合したりするキューとして機能すると述べている。⁴

(9) Interactions with the world leave traces of experience in the brain. These traces are (partially) retrieved and used in the mental simulations that make up cognition. [...] Words and grammar are viewed as a set of cues that activate and combine experiential traces in the mental simulation of the described events. (Zwaan and Madden (2005: 224))

図3は、ヒトが一定の視点(P)で実体(F)を捉え、それを背景である状況(B)との関係で解釈(C)することを図示したものである。

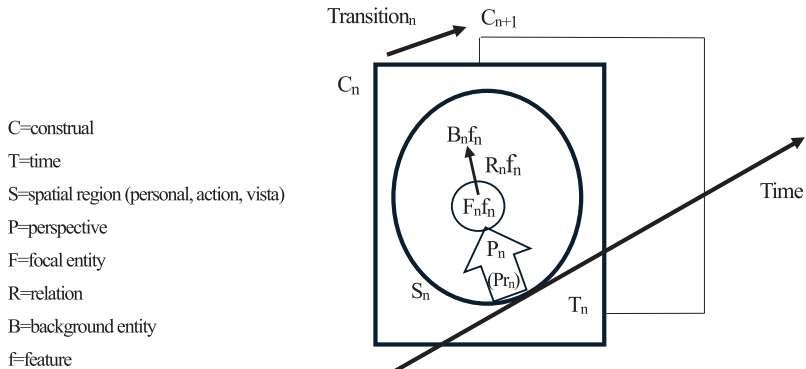


図3 (Zwaan and Madden (ibid.: 231))

このように、ヒトの本来のモノの概念形成では、そのモノだけでなく、それを知覚体験したときの状況も含まれている。そのため、話し手と聞き手がモノの知覚体験を共有している場合には、語の指示対象だけでなく、そのときの状況も共有される。

⁴ 「語」が事態をメンタルシミュレーションするために、知覚体験の痕跡を再活性化したり統合するキューとして機能するという点について、Barsalou and Wiermer-Hastings (2005) は、語の意味はその背景をなす場面（状況）との関係で理解されるとして以下のように述べている。

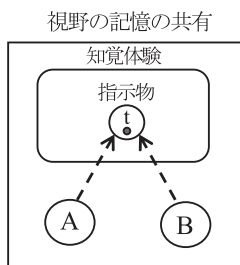
(i) Understanding what *CHAIR* means relies not only on the physical properties of the object, but also on the settings in which it is found (e.g., classrooms) and the activities performed in them (e.g., attending lectures). (Barsalou and Wiermer-Hastings (2005:131))

従って、その語を発することで、話し手と聞き手の間で指示物が同定できるわけである。そのため、あえて同定可能であることを表示する文法装置 (the) は必要ないということになるのである。

たとえば、一緒にケーキを買いに行ったという状況の中での会話として、(10) のやり取りがあるとした場合、図 4 のように、発話者 A と B は、ケーキを買った状況を共有しているので、その「視野の記憶」の共有から「ケーキ」と言うだけで、どのケーキを指しているのか理解できるわけである。⁵

(10) A: ケーキどこ？

B: 冷蔵庫の中よ。



では、なぜ英語では定冠詞 (the) が必要なのか。結論的にはこのことは、発話状況の中で、話し手が聞き手に特定の実体を想起させるために the が必要であるからに外ならない。ここには、英語話者のモノや事態の認識の仕方が深く関わっているのである。そこで次節では、英語話者の事態認識のメカニズムを概観する。

4. 英語話者のモノや事態の認識

言語話者によって事態の認識のしくみが異なっていることは周知のことであり、このことについて、月本 (2008) は、ヒトは言語音を左脳で処理するが、発話開始時にはまず母音の発音を準備して、それを内的に聞いており、その際に日本語話者は母音を左脳で聞くために、発声系—聴覚野—言語野の回路が左脳に形成されるので、左脳の聴覚野から言語野への信号の伝達が瞬時になされ、認知的主体と言語的主体の連続性が大きく、日本人の心は状況や環境に埋め込まれている割合が大きいものに対して、英語話者は母音を右脳で聞くために、発声系—右脳の聴覚野—左脳の言語野で回路が形成されるので、右脳の聴覚野から左脳の言語野への信号伝達に数十ミリ秒時間がかかり、認知から言語への移行が円滑にいかないために、認知的主体と言語的主体の連続性が小さく、英語話者の心は状況や環境に埋め込まれている度合いが少ないと述べ

⁵ 図 4 の円の中の t と黒丸はモノのタイプ (t) の具現形 (instance) であることを表している。

ている。

この右脳の機能に関して更に付け加えると、Ramachandran (2011) は、次のように、右脳が有している機能の1つは、認知主体が自身を分離して映し出すということであり、このことが第三者視点で事態を認識することを可能にすると述べている。⁶

(11) [...] one job of the right hemisphere is to take a detached, big-picture view of yourself and your situation. This job also extends to allowing you to “see” yourself from an outsider’s point of view. (Ramachandran (2011: 17))

この日本語話者と英語話者の脳内回路の違いは、当然事態の言語化の違いに表れる。たとえば、列車の車窓から山が見えたことを聞き手に伝える場合でも、日本語と英語では (12a, b) のように表現の仕方が異なっている。

(12) a. 山が見える。
b. I (can) see a mountain.

つまり、日本語話者の場合には、次の図 5(a) に示されるように、自分自身は見えの範囲にはないので言語化されず、眼前に見えている「山」という知覚対象とそれを「見る」という知覚行為が言語化されるのに対して、英語話者の場合は、図 5(b) のように、自分を含めて事態全体を客体化して認識して言語化する。ここで重要なことは、日本語話者の場合には、「知覚と認識が融合した認知」の仕方であるのに対して、英語話者は「知覚と認識が分離している認知」の仕方であるということであり、そのため前者では、「見え」の認知空間がすべてであるのに対して、後者はいわばオンステージ領域 (OS) とオフステージ領域という2つの認知空間が存在しているということである (濱田 (2016) 参照)。

⁶ このことに加えて、Zacks et al. (2007) は、以下のように、被験者が物語を読んでいる際の脳の状態を測定し、事態展開の境界 (event boundary) に右脳の前側頭皮質と前頭皮質 (right anterior temporal and frontal cortex) が関与していることを明らかにしている。このように、物語の中の個々の事態の境界を認識できるのは、それぞれの事態を客体化して認識しているからであると言える。

(i) [...] the data suggested that the processing of these changes led to the perception of event boundaries: An overlapping network, including posterior parietal, and right anterior temporal and frontal cortex transiently increased in activity at event boundaries and these increases were fully mediated by activity associated with event changes. This pattern of results supports EST’s claim that changes lead to transient increases in prediction error, which in turn lead to the detection of event boundaries and the updating of event models.

(Zacks et al. (2007: 17))

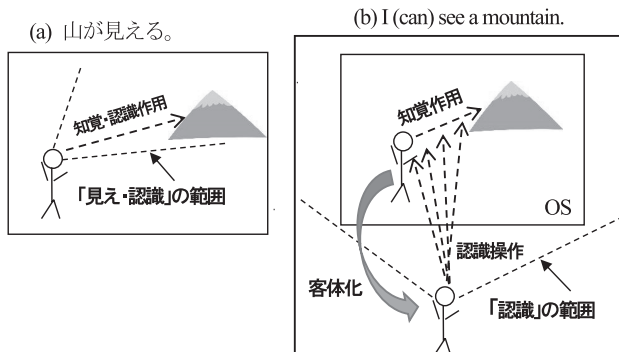


図 5

このように英語話者が事態を客体化して認識することから、話し手と聞き手がそれぞれの認知空間を形成することになるので、発話状況の中で話し手が想起した実体を聞き手も想起して同定することを可能にするためには工夫が必要であり、そのために定冠詞の *the* が発達したと考えられる。次節では、このことについて更に議論を深めたい。

5. なぜ英語の定冠詞は *the* ののか

定冠詞の *the* は、図 6 のように、指示詞の *þæt* (ModE では *that*) が文法化したものである。古英語の指示詞には *þis* (ModE では *this*) もあるが、それが文法化して定冠詞として使用されなかったことには理由があると考えられる。

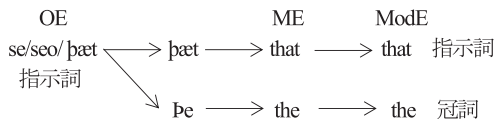


図 6 (保坂 (2014: 15))

というのは、図 7 のように、*þis* は proximal な実体を指し、*þæt* は distal な実体を指すからである。

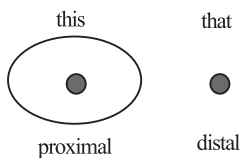


図 7

つまり、話し手が指しているモノを聞き手も同定することが可能になるためには、話し手は聞き手の認知空間の実体にアクセスする必要がある、そのため *pat* が文法化した *the* が使われるようになったと考えられる。

そこで、この観点から先の (12) に対応する (13) を例にして、定冠詞 (*the*) の機能について考えてみる。

(13) A : Where is the cake?

B : It's in the fridge.

ここで重要なことは、英語話者は、図 8 のように、事態を客体化して認識するので、話し手 (A) と聞き手 (B) はそれぞれの認知空間を形成するということである。このような場合、話し手は自分の認知空間に想起している実体 (C) が何であるかを聞き手が理解して、破線で示される同一指示的な実体を自分の認知空間に想起するためには、話し手は、図中の A から B の認知空間内の C に向けられた破線矢印によって示されるように、聞き手がその実体を想起することを喚起する手段が必要となる。これが *pat* が文法化した *the* の機能というわけである。

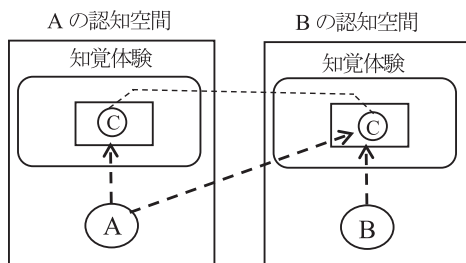


図 8

そこで、このメカニズムを図示すると以下ようになる。

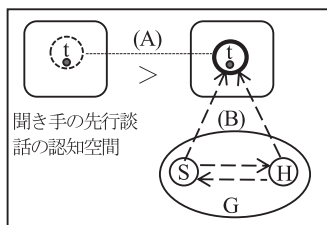


図 9

(Langacker (2008: 285) 一部改変)

まず、(A)の破線は、the が聞き手が先行談話の認知空間にアクセスするキューとして機能していることを表したものであり、その認知空間内の実体(t)にアクセスすることで指示物を特定する認知操作を表している。それに続いて生じる(B)は、聞き手が話し手とその実体を認知的に共有するという認知操作によって、両者の間で実体が同定されることを表したものである。

そして、このtheの使用が一般化することで、図10のように、指示対象が発話状況(談話空間(current discourse space (CDS)))の中で唯一的に同定可能(uniquely identifiable)な実体であることを表す文法装置として機能するようになり、(14)のような冠詞の使用が可能になったと考えられる。

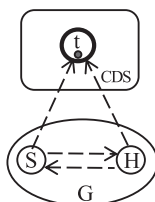


図 10

- (14) a. I bought a book yesterday. I found the conclusion of the book very interesting. (前方照応の *the*)
 b. The apartment house that John lives in is ten stories high. (後方照応の *the*)
 c. I bought a used car the other day, but the tires were a little old. (間接照応の *the*)
 d. Please shut the door. (外界照応の *the*)

つまり、「前方照応」、「後方照応」、「間接照応」、あるいは「外界照応」にしても、話し手が意図している実体を定冠詞を付加することで言及できるのは、聞き手がその実体を談話の中で唯一的に同定可能と認識できるからである。

6. 言語の語順と定冠詞の発達の有無

これまで、日本語話者と英語話者の事態認識の違いから定冠詞の発達・未発達について論じてきたが、この節では、冠詞の発達・未発達はむしろ SOV 言語と SVO 言語の問題であることを述べる。

そこでまず、ヒトの言語の語順について考えてみると、Gell-Mann and Ruhlen (2011) は、次のように、ヒトの原型言語の語順は SOV であり、その後、SVO, VSO, VOSへと変化したと述べている。⁷

⁷ このように原型言語が SOV 型の言語であったという議論については、Givón (1979), Newmeyer (2000) 等も参照。

(15) The distribution of word order types in the world's languages, interpreted in terms of the putative phylogenetic tree of human languages, strongly supports the hypothesis that the original word order in the ancestral language was SOV. Furthermore, in the vast majority of known cases (excluding diffusion), the direction of change has been almost uniformly SOV > SVO and, beyond that, primarily SVO > VSO/VOS.

(Gell-Mann and Ruhlen (2011: 17295))

そして、このように SOV が原型言語の語順であることは、下の表の SOV の言語数や語族の数からもこの語順が元になっていることがうかがえる。

表 1

	No. of languages		No. of families	
SOV	2,273	43.3%	239	56.6%
SVO	2,117	40.3%	55	13.0%
VSO	503	9.5%	27	6.3%
VOS	174	3.3%	15	3.5%
NODOM	124	2.3%	26	6.1%
OVS	40	0.7%	3	0.7%
OSV	19	0.3%	1	0.2%
Total datapoints	5,252		366	
No data	2,284		58	
Total	7,536		424	

(Hammarström (2016: 25))

では、原型言語の語順が SOV であったのはなぜか。このことについては濱田 (2023, 2024) でも認知文法の視点から論じたが、ここではその補足として、Gibson (1979) のアフォーダンス理論や脳科学の知見からも支持が得られることを述べる。⁸

Gibson (ibid.) は知覚心理学の視点から、環境と動物の相補性を論じており、環境は単に環境として存在しているのではなく、環境が動物にアフォードすることでその環境が「価値」や「意味」をもつと述べている。たとえば、陸地の表面が水平で平坦で十分な広がりをもっており、材質が堅いならば、その表面は「支える」ことをアフォードするが、小川や湖のような水平で平坦な広がりのある堅くない面は、そこに立ったり歩いたり走ったりするための「支え」をアフォードすることはないのである。このことは、環境の中に存在するモノについても同様であり、たとえば、「木の枝」は振り回したり、手の届かないところにあるモノを引き寄せることをアフォードするのであり、「石」は投げたり、それを使って何かを打ち付ける道具として使うことをアフォー

⁸ 濱田 (2023) では、SOV という語順は言語話者の知覚と認識が融合した認知を反映した語順であり、事態をそれが展開する順にたどる参照点 / ターゲット認知による事態把握であることに起因することを述べた。

ドする。このように、環境の中のモノは動物にアフォードすることで「価値」や「意味」をもつわけである。このことから言語の語順を考えると、ヒトがある特定の行為をするということは、対象物を知覚・認識して、その対象物がヒトに特定の「価値」をアフォードすることでなされるのであり、たとえば、環境の中で「ウサギ」を知覚・認識して、それが「獲物」であるということをアフォードすることで、それを捕まえるという行為をするわけであるから、この過程を順に言語で表現すると(16)のようにOVの配列となるのである。⁹

(16) ウサギ捕まえる

知覚対象を認識し、それが一定の「価値」をアフォードすることで、それに対する行為をすることによって生じるOVの配列については、脳科学の知見からも支持が得られる。

陳述性の記憶はエピソード記憶と意味記憶に大別される。たとえば、「昨夜、地震があった」という事件があり、その経験が記憶されるとすれば、それはエピソード記憶であるが、この経験を記録したり、他人に伝えたり、自分で思い出す手がかりとする「昨夜」や「地震」という心理表象は事件そのものの表象ではなく、記号化（語彙化）された意味記憶である（山鳥(2001:174)参照）。

この意味記憶とエピソード記憶の関係について、小林・村越(2005)は、意味記憶はエピソード記憶の共通部分から取り出され、スパイクタイミング依存性シナプス可逆性(STDP)を用いて連合野に形成されると論じており、¹⁰ Nadel and Moscovitch(1997)は意味記憶の形成に「多重痕跡理論(Multiple Trace Theory)」を主張し、意味記憶はエピソード記憶の痕跡から抽出され、知覚された事態を言語化する際には、モノと行為を結合する意味記憶はエピソード記憶を模して行われると述べている。従って、こうした脳科学の知見からも、「ウサギ」という意味記憶が形成され、その後で「捕まえる」という意味記憶が形成されるということになり、それを言語化するとOV型となるわけである。

ここで重要なことは、このことがヒトの本来的な事態の認識の仕方であり、その言語化がOV型であるとする、冠詞の未発達は日本語だけのことではないということになる。この点に関して、松本(2006)は、以下のように、日本語はSOV言語のプロトタイプに近く、最も安定したタイプに属しており、また、SOV言語では「定冠詞」は比較的稀であると述べている。

⁹ このようなヒトの本来的な認知過程では、「ウサギ捕まえる」で概念的に自律的な「主題関係(thematic process)」を形成するのであり、また、この主題関係の言語化には名詞の（顕在的な）格表示は特に必要ないのである。この議論の詳細については濱田(2024)を参照。

¹⁰ スパイクタイミング依存性シナプス可逆性(Spike-Timing-Dependent Synaptic Plasticity)とは、シナプス前後の神経細胞において、前細胞の後に後細胞が発火すると伝達効率が増加し、後細胞の後に前細胞が発火すると効率が減少するというものである。

(17) また日本語の OV 的配列は、支配の方向性が驚くほど首尾一貫した最もプロトタイプに近い型と言ってよい。また、この語順の型は、現存資料で遡りうる最古の時代から、基本的にほとんど変化がなく、多くの過渡地域に見られる動揺や混合特徴は、漢語やヨーロッパ語の影響による一部の現象を除いて、全く認められない。日本語はこの点で、インド亜大陸のドラヴィダ諸語、アジア北・東部のアルタイ諸語と共に、OV 言語圏の中の最も安定したタイプに属し、他方、東南アジアとオセアニアを中心とする VO 言語圏とは明確な一線を画している。

(松本 (2006: 165))

(18) 名詞の定・不定を標示する冠詞は、ヨーロッパの近代諸語ではあたかも当然の存在となっているが、このような冠詞とくに「定冠詞」というものは、世界諸言語の中できわめて偏った分布を示している。概略的にいうと、SOV 型の言語にはこのような「定冠詞」は比較的稀である。

(松本 (ibid.: 196))

そしてこのことは、以下の SOV 型の言語では定冠詞が未発達であることからもうなづける。

ツェズ語：

(19) ah-ā meši b-esu-r-si.
 shehperd-ERG calf.ABS III (=noun class)-find-CAUS-PSTWIT
 ‘The shepherd found the calf (by looking for it).’
 直訳：The shepherd causes the calf to show up.

バスク語：

(20) Giltza-k atea ireki zuen.
 key-ERG door. NOM open AUX
 ‘The key opened the door.’

(今西 (2020: 14))

イディン語：

(21) waguja-ŋgu jugi-Ø gunda-l (galba:n-da)
 man-ERG tree-ABS cut-PRES axe-INST
 the man is cutting a tree (with an axe)

(Dixon (1994: 59))

更に言えば、Hammarström (2016) は、SOV という語順は、認知的 / 機能的な原理 (cognitive / functional universal) が関与する以前の原型世界 (proto-world) 段階を表しており、多くの語族はこの原型世界から引き継いだ SOV という語順であり、それ以外の語族は原型世界後に分岐したものであるとして次のように述べている。

(22) One with much stronger implications for the evolution of language is the idea that such patterns reflect the proto-world stage rather than a cognitive/functional universal (Newmeyer 2000; Gell-Mann and Ruhlen 2011; Maurits and Griffiths 2014). On this hypothesis, many families have SOV order because they inherited it from proto-world (which was SOV by coincidence), and those who do not have simply drifted away from SOV during the time after proto-world.

(Hammarström (2016: 25-26))

この Hammarström (ibid.) の主張から、SVO という語順は、SOV から認知的 / 機能的な原理が働いてできたということになるが、ここでいう認知的原理には事態を脳内で客体化して認識するという認知操作も含んでいると考えられる。従って、このことからこれまで英語を例に論じてきた SVO 言語と定冠詞の発達に関する小稿での考察は妥当性を有していると言えるのであり、SOV の語順が SVO に変化したことで、言語話者（話し手・聞き手）は言語コミュニケーション上、談話内の名詞の指示を明確にしなければならなくなり、定冠詞 (the) を発達させたと考えられる。

7. まとめ

小稿では、ヒトの本来的な認識では、知覚対象の概念形成には、そのモノ自体だけでなく、それを知覚体験した状況も含まれており、話し手と聞き手がモノの知覚体験を共有している場合には、語の指示物と共にそのときの状況も想起されるので定冠詞は未発達であることを述べた。それに対して、英語のように定冠詞が発達している言語では、状況を共有していても、事態を客体化して認識することで、話し手と聞き手がそれぞれの認知空間を形成するので、話し手が聞き手に特定の実体を想起させ、意図している実体を同定させるために言語コミュニケーション上の必要から定冠詞が発達し、それが定着して、談話上同定可能な実体を表示するマーカーの役割を担うに至ったことを主張した。ヒトの言語の文法装置は、生物進化と同様であり、必要なものは発達し、必要ないものは発達しないか、あるいは淘汰されるのである。

参考文献

- Barsalou, L.W. (2008) "Grounded Cognition," *The Annual Review of Psychology*, 617-645.
- Barsalou, L.W. and K. Wiemer-Hastings (2005) "Situating Abstract Concepts," In Diane Pecher and Rolf A. Zwaan, eds., *Grounding Cognition*, 129-163, Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*, Cambridge University Press.
- Gell-Mann, M. and M. Ruhlen (2011) "The Origin and Evolution of Word Order," *PNAS: Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 10: 1-16.
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin. (『生

- 態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』古崎敬他共訳，サイエンス社，1985.)
- Givón, T. (1979) *On Understanding Grammar*, Academic Press.
- Glenberg, A.M., D. Havas, R. Becker, and M. Rinck (2005) “Grounding Language in Bodily States—The Case for Emotion,” In Diane Pecher and Rolf A. Zwaan, eds., *Grounding Cognition*, 115-128, Cambridge University Press.
- 濱田英人 (2016) 『認知と言語—日本語の世界・英語の世界』開拓社.
- 濱田英人 (2023) 「SOV 言語から SVO 言語への語順の変化の認知的基盤—ヒトの認知と言語化のメカニズム—」『札幌大学研究紀要』第 4 号, 95-119.
- 濱田英人 (2024) 「SOV 言語と SVO 言語の語順の原理—言語の能格性と日本語—」『札幌大学研究紀要』第 6 号, 31-53.
- Hammarström, H. (2016) “Linguistic Diversity and Language Evolution,” *Journal of Language Evolution*, 19-29.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』開拓社.
- 今西祐介 (2020) 『言語の能格性』ひつじ書房.
- Kiefer, M and L. W. Barsalou (2013) “Grounding the Human Conceptual System in Perception, Action, and Internal States,” *Tutorials in Action Science*, 381-401, Cambridge: MIT Press.
- 小林雄作・村越一支 (2005) 「STDP を用いたエピソード記憶から意味記憶を形成する神経回路モデル」『電子情報通信学会論文誌』D-II Vol. J88-D-II, No.10, 2134-2143.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- 松本克己 (2006) 『世界言語への視座』三省堂.
- Nadel, L. and M. Moscovitch (1997) “Memory Consolidation, Retrograde Amnesia and the Hippocampal Complex,” *Current Opinion in Neurobiology*, 217-227.
- Newmeyer, F. J. (2000) “On the Reconstruction of ‘Proto-World’ Word Order,” In Knight, C., M. Studdert-Kennedy and J. R. Hudford, eds., *The Evolutionary Emergence of Language*, 372-388, Cambridge University Press.
- Pecher, D. and R.A. Zwaan (2005) “Introduction to *Grounding Cognition: The Role of Perception and Action in Memory, Language, and Thinking*,” In Diane Pecher and Rolf A. Zwaan, eds., *Grounding Cognition*, 1-7, Cambridge University Press.
- Ramachandran, V.S. (2011) *The Tell-Tale Brain*. W.W. Norton & Company.
- 月本洋 (2008) 『日本人の脳に主語はいらない』講談社.
- 山鳥重 (2001) 「ヒトの記憶機構の分化と局在」『脳の高次機能』174-185, 朝倉書店.
- Yeh, Wenchi and L. W. Barsalou (2006) “The Situated Nature of Concepts,” *American Journal of Psychology*, Vol. 119, No.3, 349-384.
- Zacks, J.F., Nicole K. Speer, Khená M. Swallow, Todd S. Braver, and Jeremy R. Reynolds (2007) “Event Perception: A Mind/Brain Perspective,” *Psychol Bull*, 133(2), NIH

Public Access Author Manuscript, 1-37.

Zwaan, R.A. and C.J. Madden (2005) “Embodied Sentence Comprehension,” In Diane Pecher and Rolf A. Zwaan, eds., *Grounding Cognition*, 224-245, Cambridge University Press.